

(2) 指導者

- ・公益財団法人岩手県スポーツ振興事業団職員
- ・NPO法人乗馬とアニマルセラピーを考える会
- ・国立岩手山青少年交流の家 副主任企画指導専門職 佐々木 克子
- ・国立岩手山青少年交流の家 企画指導専門職 丹 康浩
- ・国立岩手山青少年交流の家 企画指導専門職 中田 春輝
- ・国立岩手山青少年交流の家 企画指導専門職 高橋 省一
- ・国立岩手山青少年交流の家 事業推進係長 田口 康宏
- ・国立岩手山青少年交流の家 事業推進係 長谷川 祐太

(3) 企画のポイント

虐待を受けた子供が、大人への信頼を回復し一歩前に踏み出せるように、ゆとりある日程の中で大人1名に子供が1～2名程度になるよう、十分なスタッフの配置となるようにした。今回のキャンプでは、交流に家周辺の恵まれた立地条件や自然環境を活かすよう、「アドベンチャー」をテーマにいかだ作り体験をメインの活動プログラムとした。班での活動を活発にさせ、施設間の交流をより図っていきたいと考え、協同作業や初めての体験への挑戦場面を組み込むプログラム構成とした。また、年間を通して各施設の登山やスポーツ大会、スキー教室等の行事のサポートを行い、子どもたちとの関わりを持てるよう配慮している。

(4) 広報のポイント

参加対象者を4つの施設に入所している児童・生徒と限定したことから、公募の形ではなく各施設で参加者を4人以内で確定してもらった。参加者は様々な家庭事情を抱えているため報道機関への取材依頼は行わなかった。

(5) 運営のポイント

参加児童・生徒にタートルズキャンプへの共通理解を深めてもらうために、4つの施設を事業開始前に訪問し、交流の家職員から参加者に対する対応事例の説明と参加者同士の顔合わせ会を行った。顔合わせ会では、昨年度のキャンプの様子を紹介しながら、今年のキャンプの活動内容について説明することでキャンプへの意欲付けをするとともに、参加する職員を紹介しながら交流を図った。

職員間でも、参加者への対応の仕方について共通理解を深めるために、参加者就寝後にスタッフミーティングを2日間行い、参加者の行動の変化や担当する班の様子について情報交換を行った。

7 成果とその普及

参加した児童・生徒が関わりを深め、進んでコミュニケーションを取り合う姿が見られた。今回のキャンプでは、初日に「出合いのパーティー」を行うことで施設の垣根を越えた交流が深まり、その後の活動にも良い影響が見られた。特に、いかだ作りの場面では、他施設の上級生がロープの結び方に困っている下級生に優しく声をかけ協力して一緒に活動を進める姿が見られた。

施設の職員や交流の家職員の連携もうまく図ることができたことから、子供たちへの対応もスムーズにできた。さらに関連サポート事業として、施設の様々な行事に参加したことで、各施設職員との信頼関係を構築するとともに、児童生徒との対応、指導を実践することにより、交流の家職員の資質能力向上を図ることができた。

子供たちのキャンプの変容を把握し、参加者の感情を読み取るため「じぶんバロメーター」で個人個人のその日の感情を数値化し前日と比較した。「つながりマップ」では、自分の身近にいた人を記入させることでコミュニケーションの広がりを把握した。また、事前事後に自己肯定感を図る10項目のアンケートを実施し分析を行い子どもたちの変容把握を試みた。

今回の成果を、県立の青少年教育施設等に紹介し普及を図るとともに、このような子供たちを社会全体で支援していくという考えのもと、当施設としても事業の内容を充実させていきたい。

8 今後の課題

4施設の理解を得て児童指導員を各施設1名派遣していただいている。各施設ともそれぞれの職場の勤務態勢に合わせての派遣となっている。情緒障害が顕著でマンツーマンの対応が必要な子どもも数名参加している現状では、きめ細やかな指導を行うためのスタッフの確保とスキルアップ研修が必須であると考え。また、参加者の中には、毎年参加している児童もいて「慣れ」を感じる場面もあった。参加者のニーズと設定した狙いがずれないようにプログラムを構成していく必要がある。



「いかだに6人も乗ったよ！」



「初めて馬に乗ったよ！」